

平成 29 年度文化庁補助事業

「陶芸の森アーティスト・イン・レジデンス国際文化促進交流促進事業 2017」
陶芸の森より派遣された

Haystack mountain school of crafts そして penland school of crafts について

両クラフトスクールは NPO である。



(2017.05.27~6.7)

伊丹発成田。

成田発ニューアーク空港着

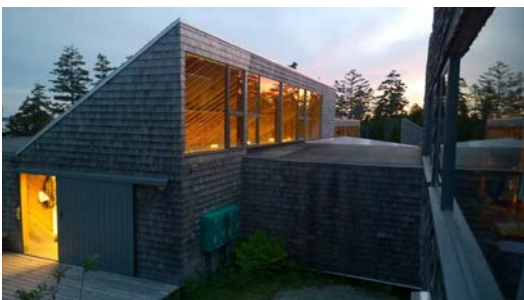
翌日

ニューアーク空港発バンゴア空港着

バンゴア空港からは公共機関のないところなので、七人乗り合わせのタクシーが迎えがあり、とても助かりました。2 時間ほど車で移動してヘイスタックへ。

(2017 5/27~6/7)

Haystack mountain school of crafts



施設はその建築が賞を受けたこともある建築家エドワード・ララビー・バーンズによって設計。

6つのスタジオ（陶磁器、繊維、グラフィックス、鉄、金属、木材）と※（後述）fablabがある。



ヘイスタックは避暑地として有名な場所で、風光明媚。スタジオからは海が見え、敷地全体が海岸線にある林とコケに包まれた大変美しい場所でした。

スタッフ、生徒がすべて着席できる大きな食堂と宿泊施設が完備されている。

2013年より Haystack で開始された「レジデンシイプログラム」に参加。

ヘイスタックでのレジデンシイプログラムは、「セッション」と呼ばれる通常の「先生が生徒を教える授業の形態」のものが始まる前に行われる、招待作家がいろんな工芸の体験ができることを主眼とした二週間のプログラム。



レジデンシイプログラムが始まると、私が所属していたクレイ（陶芸）のメンバーの中でも、「普段できない技術を体験、習得するために二週間を過ごす」という人が何人もいた。

たとえば、陶芸家の女性が初日にクレイスタジオに荷物を置きに来たきり※fablab(ファブラボ)

に行って二週間、クレイスタジオには来ることはなかった。

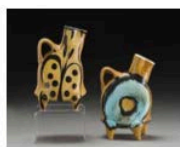
「自分の工房でできることは自分の工房に帰った時にする。それよりもここでしか体験できないことの方が重要で、私は3Dプリンターで、型を作ったり、新しい作品を作る方法を学ぶ」とのことだった。

Suzeさんのやっていたこと



やったことがない技法をやる

ゼラチン状の版下にペイントして滲んだイメージを紙に写し取る



アメリカで高名な陶芸家 Suze Lindsay さんも、ペイントスタジオで制作時間のほとんどを使い、終盤に 30 枚ほどのペイントで作ったあたらしいデザインを、陶器に写して、「これを素焼きまでして、後は自分の工房で焼けばいい」と話されていた。

ヘイスタックには薪窯はなく、ガス窯による塩窯を焼成するということだったので、私も信楽では使ったことがなかった磁器土を初めて使って、初めての塩窯を体験することにした。



その時に使用していた、私がろくろで使う「牛ベラ」と呼ばれる道具をクレイスタジオにいたメンバーが興味を持って、数人で一緒に作るようになった。



ウッドスタジオで作った陶芸の道具

隣にあるウッドスタジオに行き、すぐに作ることができた。ベルトサンダーやベルトソーなど、普段は近寄ることもできないような工作機械を使わせてもらった。



ウッドスタジオの指導員 Tim さん（左）と
中央 篠原
クレイスタジオの指導員ネイトさん（右）

それぞれのスタジオではオープンスタジオの日が設けられていて、興味のあるものはそこで説明を聞いたり、そのまま制作をさせてもらったりできる。



私は焼きあがった酒器の取手をメタルスタジオで制作させてもらった。
連日、いろんな工房を訪ねて、今まで見たこともなかった紙を漉くところから始めるブックメイキングや fablab で出来上がる 3D プリンターで作った模型などを見学させてもらった。

● 窯焚き



7ポンドの塩を用意



塩を窯に投入

大量の煙が噴き出す

クレイスタジオでは塩窯を焚いた。
燃料はガスで温度を上げていき、最終の仕上げ付近で7ポンドの塩を窯に投入。

塩のアルカリ上記により釉薬や土の鉄分と反応を起こし、景色を作る。

● 食堂の役割について



メイン州の三つの島を渡った先の海岸生にあるヘイスタックは周辺に商店もないところ。食事は大きな食堂で、三食、皆一緒に食べる。

時間になると鐘が鳴りそれぞれのスタジオから集まってくる。

食事時間は各 30 分と決められており、その時間を逃すと食事が取れないので、

空いている席があれば座って、さまざまな分野の作家と話すきっかけとなる。

毎日三回の重要な交流時間となるので、食堂で集まって食べることは、二週間という短い期間を有効にするための必要なシステムだと感じた。



またメイン州はロブスターで有名。
期間中1日はロブスターを食べる日があった。
海岸まで降りて行って、みんなで食べ、交流しました。



また、毎回ディナーの後には大きなケーキが出てきて、とても美味しく、毎晩の楽しみになっている。

● 高鶴丹穂さんについて



高鶴丹穂さん
ボストン在住の日本人。父は高鶴元さん。

おなじクレイクラスには日本人でアメリカ在住の高鶴二穂さんがおられました。

高鶴さんの父は福岡上野焼の高鶴元さん。

高鶴元さんは上野焼を始めとして、陶芸の研究の成果を買われ、ハーバード大学へ招聘されることになり、家族で移住。丹穂さんが中学生の時。

丹穂さんは今までは陶芸をしておらず、ガラスやファイバーを使った現代アートの作家として活動されてこられた。

今回十数年ぶりのヘイスタックへは、自分のルーツである陶芸を始めてやってみようという気になったからとおっしゃっていました。

その動機となったのも、いままでアメリカでは「陶芸はアートとしての認知度が低く、特に工芸的な「使えるもの」はアートの範疇に入っていなかった。しかし近年、「陶芸に対する評価がすこし変わってきたように思う」とお話を伺い

ました。

その他、アメリカのアートについて、日本の陶芸についていろいろと教えていただけて、大変素晴らしい出会いとなりました。

- 二週間の終盤にはスカラシップオークションが開催される。



それぞれ作ったものをオークションに出品し、オークションにかけて販売する。

売り上げは、ヘイスタックスクールの運営資金や奨学金へ寄付される。

旅程の都合で私はオークションの日には出発しなくてはいけなかったため、作品だけお願いしてヘイスタックをあとにした。

私は磁器土で作った酒器にメタルスタジオで制作した金属の取手をつけて、出品した。

私はスケジュールの都合で二日早くヘイスタックを去り、タクシーでバンゴア空港まで送っていただき、次の訪問地ペンランドに発った。

五月のレジデンシイプログラムが終わると通常のセッションが始まる。

※（デジタルからアナログまでの多様な工作機械を備えた、実験的な市民工房のネットワーク。

2002年 MIT（マサチューセッツ工科大学）の提唱によりスタート

2011年4月現在、少なくとも世界20カ国以上50か所以上にファブラボが存在)

ヘイスタック編おわり

(2017 2017 6/7 セッション開始 6/11~6/23)

Penland School of Crafts ノースカロライナ州

ペンランドも車で二時間ほどの山中にあるため、公共の交通手段はなくアシュビル空港までタクシーが迎えがあり大変助かりました。

● Penland School of Crafts



工芸家が創造的な生活できるよう、支援する工芸教育の国際センター。NPO。

ノースカロライナのブルーリッジ山脈に位置するペンランドは、製本、陶芸、絵画、ガラス、鉄、アクセサリー、写真、版画、活版、織物、木工のクラスがあり、宿泊施設、食堂を完備。



夏には2週間のクラスセッションを開催。

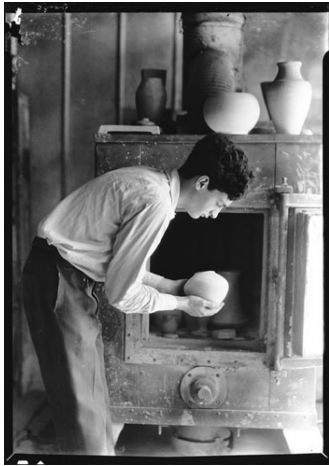
その他にも8週間の長いものや、春と秋には1週間ほどの短いワークショップを開催している。

3年を期限とする選ばれたアーティストはペンランド周辺に用意された住居と作業場を借りて制作ができる、レジデンスアーティストの制度がある。

子供達がペンランドで制作体験ができたり、スカラーシップや独立記念日のイベントなど、地域との交流プログラムが開催されている。

一般の人でも利用出来る、ペンランドのレストラン。

ギャラリーとインフォメーションセンターを提供している。



ペンランドの歴史

1920年にノースカロライナ州ペンランドに初めて訪れたルーシー・モーガン。

1923年に、彼女はベレアカレッジで3ヶ月を過ごし、編み物を学び、ペンランドに再び戻り織物の技術と材料を地元の女性に提供し、次に手織り作品の商品の販売を始めた。

1928年、エドワード・ワースト (Edward F. Worst) が州外の学生と地元の女性グループによる、1週間のクラスを開設。

ペンランドの学校が生まれる。

数年のうちに、モーガンは他の工芸品を加え、資金調達と建築を始めた。

私は session2 の二つあるクレイクラスのうちジョシュコーパス氏 (米) と ベンリチャードソン氏 (豪) のクラスを受けました。そしてもう一つのクラスはフランスから来られたエアベイルソー氏 (仏) とケビンリップス氏 (米) でした。



ジョシュコーパス (米) ケビンリップス (米)
エアベイルソー (仏) ベンリチャードソン (豪)

レジデンシイだったヘイスタックとは違い、クラスごとに制作のテーマに従って、行動していく。

普段のセッションでは二つのクラスは別々のことをするそうですが、今回のクレイ 4 人の先生は共同でアメリカの原土 (ワイルドクレイ) をテーマに、ノー

スカロライナ産出の粘土を掘るところから始めて、製土し、その土で制作をして、登り窯とホールキルンと呼ばれる薪を燃料とする窯、二つを同時に焚くことがミッションとなっていました。

メンバーは18歳から80歳までの性別や経験を問わないもので、実際に確認できたクレイクラスのメンバーの最高齢は78歳の女性でした。

受講も初めての人もいれば毎年22回目のベテランまで様々な構成になっており、スクールといっても日本の「学校」とは全くちがうものでした。



ヘイスタックに比べ、ペンランドは薪窯が大変充実しており、私も普段信楽で、土を原土の状態から扱い、薪を燃料として焚く窯である「穴窯」を使っているため、アメリカの土はいかなるものかという興味を持ってきた私にとっては幸運な内容でした。

- ペンランドのレジデンスアーティスト制度について。



ペンランド周辺には、3年制作を認められた招待作家が、使用を許される低コストの住宅とスタジオスペースを3年間、作家に提供する、というレジデントアーティストプログラムがある。二週間のセッションの間、1日周辺に住む工芸家の工房に尋ねて行ける日がある

生徒はスクールから歩いて行ける距離にある工房を見学できプロの話を聞いて、作品を鑑賞、購入もできる。

そしてまた、ペンランド周辺には、たくさんの工芸作家が定住もしており、その多くは過去にペンランドで学んだり、教えたりしている経験を持っている作家である。

そのおかげで、現地で実際に活動している作家に気軽に会いに行くことができ、これは特に、これからプロの工芸家を目指す若い人には、重要な機会になります。



ペンダナボタリ訪問
ギャラリー開設
ペンランドから訪ねて見学、作品を購入できる。



ペンランドヒストリーのような存在、陶芸家のシンティアさん工房見学

信楽に住む私にとっては、彼らの姿が私の立場になるもので、遠く外国から「信楽をみてみたい」と来てくれる人々が、喜んでくれるように振る舞うことが、彼らがしてくれたことへの感謝の気持ちにもなると今は思っています。

● 食堂について



ヘイスタックでも感じたことでしたが、ペンランドでも食堂は重要な役割を果たしている。

英語のしゃべれない私でもテーブルに座り、様々な他分野の作家と話す機会となっており、そこで出会った例えば自分が全く

知らなかったブックメイキングの生徒と出会い、「昼食の後、見学してもいいですか？」という感じで、知り合いになり新たな分野を見たり体験できたりする、重要な機会を生む場となっている。



また、食堂にはペンランドの関係者だけではなく、一般の観光客も利用出来るレストランも併設されていて、ゆっくりと食事をした後、クラスを見学して回ることもできる。

地元住民との交流もでき、オークションやイベントに参加することなどとともに、ペンランドが地元住民にも親しまれている理由がここにあるように思う。

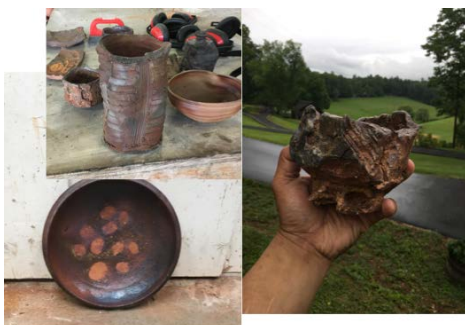
● スカラシップについて



現地で話に聞いた所 NPO 組織であるペンランドの自主運営できる費用の割合は、40 数パーセントにとどまっている。その残り 6 割近くを寄付やオークションなどの売り上げで補っているとのこと。とてもアメリカらしいと感じた。

セッション毎の終盤には「スカラシップオークション」という競りが開催され、生徒も先生も希望するものは作品を提供し、オークションにかけ、その売り上げを寄付できる。

参加している客は、生徒、先生、招待された人たち、地元住民も参加できる。売り上げは寄付に廻されることを客もよく知っていて、売れ残ることはない。



ワイルドクレイで作った三点をオークションに出品

私も登り窯で焼いた作品を 3 点出品し売り上げがあった。

合計は 5500 ドル以上一夜で売り上げがあった。

また、夏には一度、とても大きなオークションが開催される。



また、工房の何か所かに「ドネーション（寄付）の棚」が設置されており、募金箱に 5 ドル入れると棚に置いてあるものを買うことができる。

これも運営の寄付金となる。

- 二週間という期間について

ヘイスタックもペンランドも期間は二週間。

陶芸において二週間という時間は短く、制作、焼成というだけでもギリギリの時間である。このことはそこで制作完成させることよりも、その場所に様々な工芸家が集まって交流することの方に重きを置いた方が良いということだと考えました。

アメリカの陶芸家の日本、信楽に対する印象

私がペンランドで出会ったメンバーの中には、私がヘイスタックに行っている期間、ちょうど信楽に行っていたという人がいました。

陶芸の森にも行ったということでした。その他、クレイクラスのアシスタントなど他のメンバーの中にも「日本に行った」または信楽に行ったという人がおり、行ったことがない人も「信楽にはいつか絶対行きたい」と話していました。またアシスタントが言うには「私たちのような仕事をしている人で **Shigaraki** を知らない人はいないよ」と聞いた。

ただし彼らの知っている「**Shigaraki**」は室町期に代表される穴窯焼締の壺や花入の事のようにでした。

- 窯たき、引出黒のこと

クレイクラスのセッション 2 では四人のクレイクラスの先生全員が薪窯の作家

ということもあり、ペンランドのホールキルンと呼ばれる窯と登り窯の二つの薪窯に作品を詰めて同時に焚くことになった。

土堀り、土づくり、そして2日かけて薪窯で焼くというスケジュールだったので、十分な制作、乾燥時間ではなかったが、作品を完成させることよりも体験することが重要であることを理解した。

窯焚きの終盤では、窯にいれられるだけの大量の炭を投入して終了した。

● 引出黒について



登り窯の中には日本で引出黒（ひきだしぐろ）と呼ばれている、鉄分の多い粘土をかけて窯に入れ、鉄が解けた頃に鉄棒で引っ掛けて取り出し急冷させ、黒い色の焼き物をとる技法も試すことになった。



きっかけは、みんなで土を掘りに行きペンランド敷地内で採取した赤土が、鉄分が多く「すこし灰を足せば、日本の引出黒のようになりそう」と私が言ったこと。

するとタスマニアのベン氏に「やってみてくれ」と言われ、ぐい呑、湯のみなど数点入れることになった。

シカゴから土を持ってきていた人もいたので、それも引出黒の材料として窯に入れ、温度が上がってきた頃に順番に引出して溶け具合を確認しながら、引出黒をとることができた。



その際、日本ではセルシウス度であるのに対して、アメリカで使われているファーレンハイト度は初めてで、何度も惑わされ苦労したが、ほとんどの人が窯焚き中の窯内部から器を引き出す行為を見たことがなかったため、とても喜んでくれた。

● おわりに

ヘイスタック、ペンランドの二大クラフトスクールをめぐって、クラスのメンバーからは「ペンランドに行けて羨ましい」「ヘイスタックに行けて羨ましい」と聞きました。どちらもアメリカの工芸家にとってとても大切な場所であることが伺えました。

私のような、ワークショップやレジデンシイの経験がない人間が、どのようにこの機会を生かすべきか、ずっと旅の間考えていましたが、ヘイスタック、ペンランドと経験を重ねていくうちにワークショップやレジデンシイなどを理解することができました。

しかしアメリカでワークショップを見ているうちに、気づいたことは長年私が見てきた、陶芸の森で開催されている世界の陶芸家のワークショップでした。

私の穴窯の原体験は、ピーターヴォーカス氏でした。

私はまだ十代で、作りの時から豪快で驚き、また穴窯に作品を寝かして詰めて焼き上げる。焼きあがったものを見て釉薬をかけないのに、さまざまな変化が出来ることに驚いたのが、自分の穴窯への興味のはじめでした。

また、今回の旅を通じてメンバーとずっと話題になっていた「牛ベラ」も、陶芸の森で、唐津の陶芸家中里隆氏に指導してもらえる機会があった時に教わったものでした。

その他にもアメリカで活躍しているたくさんの陶芸家のワークショップを陶芸の森で見られていたことにアメリカに行ったことで、気づくことができました。レジデンシイやワークショップに無関係と思っていた私にとって、これまで陶芸の森で見せてもらってきたものが、すべてつながった瞬間となりました。

今回の文化庁補助事業に参加させてくださった、陶芸の森をはじめヘイスタック、ペンランドの関係者の皆様に、こころよりの感謝を申し上げ、この経験を必ず今後の制作に生かしていきたいと思えます。ありがとうございました。

篠原希